おしくらまんじゅう、押されて泣くな

関西大学　社会安全研究センター　小澤　守

子供の頃，友達と遊んだ記憶があろう．冬季の寒い日，校庭や広場に描いた円の中でお互いに背を向けて押しつ押されつして，円から押し出されたら負け．おしくらまんじゅうである．1911年の創立で嘉納治五郎が初代会長である公益財団法人日本スポーツ協会（JSPO）のホームページ中におしくらまんじゅうの遊び方のページがあった．JSPO公認の遊びなのである．

押し合い圧し合いが遊びのうちはいいのだが，2001年の明石花火大会歩道橋事故みたいに群衆雪崩のようになってはたまらない．群衆雪崩は花火，コンサート，スポーツなどともかく大勢の人たちが見たい聞きたいと殺到した結果，幾何学的に拘束された通路などで密集状態となってそれぞれが自らの意思で移動できなくなり，集団があたかも雪崩のように崩壊する事象である．専門家の談によれば1m^{2}当たり10人もの人が密集すると極めて危険な状態になるという．呼吸もできず，ましてや子供たちも巻き込まれたらますます密度が高くなり，どこかで一人でも倒れるようなことがあると一挙に人々が重なり合い，圧死者が続出することになる．

日本で最大級の被害を出したのはWikipediaによれば1807年の永代橋崩落事故だそうで400名あまり，また1956年の彌彦神社事故で死者数120名あまり，くだんの明石花火では11名．海外ではさらにすさまじく1896年モスクワで1400人弱，1990年メッカで1400人強，2015年メナー群衆事故では2000人強の人が圧死している．昨年韓国での梨泰院で158人の死者が出たことは記憶に新しい．

お祭り，スポーツイベント，花火，ハロウィンなどいずれも多くの人の関心を呼ぶイベントであるのは理解するが，何故そこまで密集しているところに人は集まるのか．その昔，ある子供服のブランドメーカーが大規模な即売会を開催し，家内に連れられて出かけていったことがある．開門とともに人々が我勝ちにワゴンに殺到し，ともかく何が何でも確保しなければといった形相で片っ端から子供服をつかみ出している光景に遭遇した．人がすることに負けじとばかりに密集し競いあう様は，動物が本来的に有する生存のための行動規範，あるいは集団であるからこそ生存が可能になるといった本性的行動とでもいうのだろうか．

かつて朝のラッシュで駅のスタッフが客を押し込むのが常態化した時期があり，国電は酷電などと称されていた．筆者なども中学生の頃にはバス通学で，雨の日の最終便などはよくもまあここまで詰まるものだと感心することが度々あった．ただでさえ便数が少ない田舎のバスでこれを逃したら12km歩いて帰らなければならないとなると必死になって乗り込むことになる．一度上げた足が下せないほどの密集であったが，それでも呼吸はできたし，年寄りには席を代わり，子供がおれば膝上に座らせたりしてお互いの不自由を分け合ったものである．

人が密集して群衆雪崩となる事態は，頻度に差はあるようだが，洋の東西や民族性如何に係らず見られるようである．先に挙げた永代橋，明石，韓国の事故はいずれも対向する人の流れのなかで起こったものである．一方通行などの処置がとられておれば発生しなかったとは思うが，このような密集状態形成にはある種のPoint of no-returnともいうべき臨界状態があるのではないだろうか．

周囲の状況や自らの心理状態が，この臨界点以下なら引き返しも可能であるが，大勢集まっていて面白いことがありそう，その密集に自らも参加したい，ほかの人たちと同じような行動を自らも取りたいという駆動力が危機意識や危険予知などの抵抗力を凌駕すると，一気に密集度は高くなり，カタストロフィを引き起こす．怪しい現象論的理論を展開したが，このような密集に巻き込まれたら，それこそ個人の意思などと無関係に状態が進行するのは間違いない．雪崩も雪の重力すなわち駆動力と，斜面や下層の積雪などとの摩擦力すなわち抵抗力のアンバランスで発生するのだから，原理的には同じ事のように思える．お祭り騒ぎなど楽しいには違いないが，少なくとも密集状態から距離を置くだけの危機意識は持っていたいものである．